



営農情報

第40号 平成27年10月2日

「あまおう」10月の管理

南筑後普及指導センター

福岡大城農業協同組合

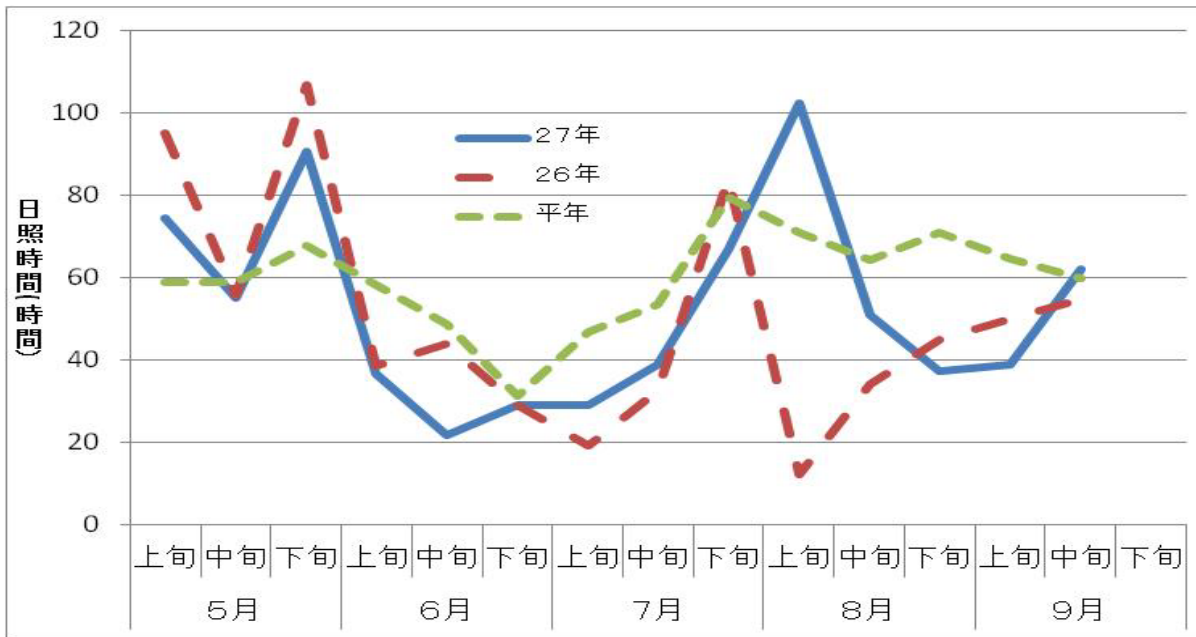
10a 当たり収量 5 t 以上を目指しましょう

【花芽分化及び定植状況】

今年は6、7月の日照不足で苗の充実が心配されましたが、7月末から8月中旬にかけての天候が回復し、充実した苗に仕上がっています。

9月に入って気温が急激に低下し、最低気温が20℃を下回る日が続いたため、花芽の動き出しも早く、花芽分化も順調でした。しかし一部では「分化以上」と「未分化」が混在したものが見受けられました。

定植時期については、株冷Ⅳ型で9月17～18日中心とほぼ平年並でした。普通ポットについては早いところで9月18日頃から定植が始まりましたが、中心は9月20～21日で平年より3～4日程度早まっています。



<アメダスデータ久留米より>

今後の管理

草勢が旺盛すぎる場合は、2番果房の分化が遅れやすくなりますので、10月上旬に草姿を観察して、草勢に応じて2番果房の早期分化に向けた対策をしっかりと行いましょう。

また、平年に比べ早くから気温が低下していますので、普通作型についてはマルチやビニル被覆時期を早めて、株づくりに重点をおいた管理に心がけて下さい。

病害虫については、現在ヨトウムシ類の発生が見られています。また、今後、炭そ病やうどんこ病の発生が懸念されますので、早めの防除に努めて下さい。

草勢の判断の目安（早期作型）

10月上旬の最大葉長（定植後出葉した中で最も大きい葉）を測定する。



○草勢が旺盛な場合（最大葉長9cm以上）

2番果房の分化を促進させるため、草勢を抑える管理を行う。

- ・ 寒冷紗を被覆する。
- ・ マルチやビニル被覆を遅らせる。（マルチをしている場合は、裾を畝の肩まで上げる）

○草勢が抑制されている場合（最大葉長8cm以下）

2番果房は分化しやすいため株の生育促進を図り、厳寒期に向けた株づくりを図る。

- ・ マルチやビニル被覆を早め、やや高めの温度管理をする。

かん水

- ・ 活着後は、ハウス内で作業が行えるようにかん水量をやや控える。
- ・ 草勢が旺盛で葉色が濃い場合、かん水を控え（pF値の目安2.0）、肥効抑制を図る。
- ・ 生育が抑制されている場合十分にかん水を行い、乾燥しすぎないように注意する。

寒冷紗被覆

- ・ 早期作型では、2番果房の分化促進のため、10月20日頃まで寒冷紗を被覆する。ただし、株づくりのため、定植直後からの連続した被覆は避ける。
- ・ 天候によっては軟弱徒長しやすいため、通気性を十分に確保する。また、曇雨天が続く場合は早めに除去する。
- ・ ほ場が乾きにくくなるため、かん水の回数や量を調整し適湿を保つ。
- ・ 軟弱な生育になるとうどんこ病の発生が多くなるため、予防散布を徹底する。
- ・ 寒冷紗被覆ハウスにミツバチを搬入する場合は、訪花を促すため巣箱をハウス内に入れておく。
※普通作型で寒冷紗を被覆しているところは、株づくりを優先するため寒冷紗を除去する。

寒冷紗の種類	遮光率
シルバー寒冷紗 109 番	39%程度
黒寒冷紗 600 番	51%程度
黒寒冷紗 610 番	58%程度

下葉除去・どろ芽除去

- ・ マルチ前に下葉・どろ芽を除去し、マルチ時の葉数が4～5枚になるようにする。
- ・ 摘葉直後は、必ず「炭そ病」と「ダニ」の防除を実施する。

追肥・中耕・畝上げ

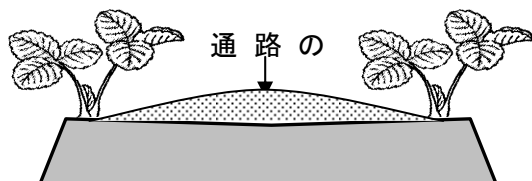
- ・ マルチ前追肥は、2番果房の花芽分化を確認した後施用する。（10月中旬頃）
- ・ 生育が順調な場合、マルチ前の追肥までは窒素分の追肥や葉面散布は行わない。
- ・ 活着不良等で生育が悪い場合は、液肥や葉面散布で生育促進を図る。

【追肥量の目安】

肥料名	成分率(%)	投入量(kg/10a)	窒素量(kg/10a)
あまおう専用肥料	8-6-3	60kg	4.8kg
新生いちご配合	6-6-4	80kg	4.8kg

（裏面へ続く）

- ・草勢が旺盛(10月上旬で最大葉長9cm以上)で、マルチ被覆までに2番果房の分化が確認できない場合、畝上の追肥を控え2番果房の分化後に溝肥を施用する。
- ・追肥施用後は必ず中耕を行い、根張りを促進させる(追肥しない場合でも中耕は必ず行う)。
- ・中耕と同時に通路の土をさらえ、畝上をかまぼこ状に整地する。



マルチ被覆

- ・生育が旺盛な場合、2番果房の分化促進のため、出蕾直前までマルチ被覆を遅くする。
- ・生育不良の場合は、早めにマルチ被覆し生育促進を図る。
- ・マルチ被覆の後は、蒸散量が多くなるため十分にかん水を行う。(チップバーン予防)
- ・マルチの裾は、生育が旺盛な場合は畝の肩まで上げておくが、通常の生育をしている場合は、下ろしたままで生育促進を図る

ジベレリン処理

- ・1番果房出蕾期に、10ppmで5cc/株の処理を行う。
- ・湿度が低いと効果が低いので、かん水後に処理する。
- ・開花後にジベレリン処理した果実は、奇形果になる可能性があるので開花前に処理する。
- ・高設栽培では使用しないか、濃度を薄くする。

ビニル被覆と直後の温度管理

- ・ビニル被覆は、平均気温が16℃を下回る頃(10月下旬頃)か、頂果の開花時期のどちらか早い時に
行う。(花に強い雨があたり、奇形果の発生が懸念されるため)
- ・ビニル被覆後は、サイド・妻面を開放し、出来るだけ気温が上がらないようにする。
- ・サイドや妻面は、最低温度が10℃を下回るようになったら、閉め込みを行う。
- ・草勢が弱い場合、早めにビニルを被覆して、やや高めの温度管理で生育促進を図る。

【 果房の生育状況別温度管理の目安 】

頂果の状況	昼間	夜間	備考
～ 着果期	26～28℃	10℃	新葉の生育促進
着果期 ～ 白熟期	24～26℃	7～10℃	
白熟期 ～ 収穫期	20～24℃	5～7℃	収穫中は品質向上のため低めの管理

ミツバチの搬入

- ・ミツバチの搬入は、頂果の開花1週間前を目安に行う。
- ・寒冷紗被覆ハウスにミツバチを搬入する場合は、訪花を促すため巣箱をハウス内に入れておく。
- ・寒冷紗除去後はハウスの外に設置し、ビニルを閉め込んだ後は巣門の前に入り口を開ける。
- ・巣箱は、巣門を南に向けて設置する。ハウス内に設置する場合は、中央より北に置く方が良い。

病害虫防除

● 炭そ病

- ・今後、マルチ後ビニル被覆後、果実肥大期に炭そ病の発生が懸念されるため、マルチ前の摘葉後には、必ず防除を行う。

● うどんこ病

- ・定植後からビニル被覆前後まで、定期的(1週間間隔)に予防散布を行う。
- ・摘葉後に、葉裏まで薬液が付着するように散布すると効果が高まる。
- ・発病葉及び発病花房は、早めに摘み取り除去する。

● ハスモンヨトウ

- ・葉裏やハウスパイプ等に、卵塊を産み付ける。

- ・ 発生初期である若齢幼虫時(1cm程度)の薬剤防除が重要となる。
- ・ 大豆畑周辺のほ場では、特に周辺からの飛び込みが懸念されるので注意する。

● アブラムシ類

- ・ ハウス周辺の雑草を徹底する。
- ・ 発生初期からの防除を徹底する。

● ハダニ類

- ・ 下葉除去マルチ後に、薬液が葉の裏まで十分かかるように防除する。
- ・ ハダニ類の活性が弱い12月に防除を徹底する。

● スリップス類

- ・ 開花中の花に成虫が飛来産卵し、ふ化した幼虫が果実に被害を与える。
- ・ 飛来する成虫やふ化する幼虫の防除を徹底する。
- ・ ハウス周辺の除草を徹底する。

【病害虫防除所調査結果】

(1)うどんこ病

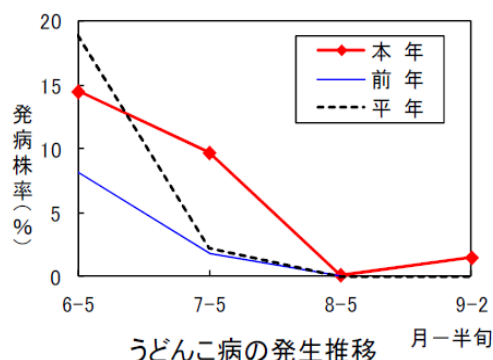
ア 9月2半旬調査の結果発病株率は1.5%であり、平年に比べて高く8月5半旬よりも増加している。

8月5半旬の発病株率は
0.1%(前年0%、前々年0%、平年0%)

9月2半旬の発病株率は
1.5%(前年—、前々年0.1%、平年0.02%)

イ 本年7~8月の30℃以上の積算時間は、前年より多いが前々年より非常に少なく、うどんこ病菌の越夏量は多いと考えられる。

7~8月の30℃以上の積算時間は 252時間
(前年147時間、前々年707時間) (アマス福岡値)



※ 前年の9-2は未調査。他のグラフも同様。

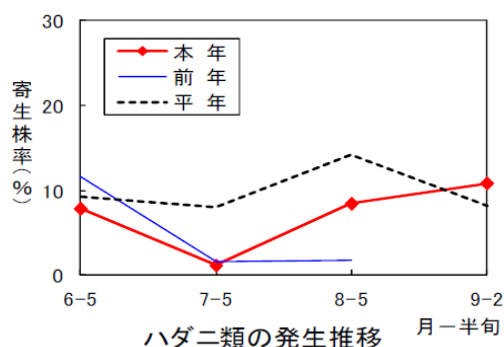
(2)ハダニ類

9月2半旬調査の結果、寄生株率は10.8%であり、平年に比べてやや高く、

8月5半旬よりも増加している。なお、寄生株率50%程度の多発ほ場が、調査ほ場12ほ場中2ほ場で確認された。

・8月5半旬の寄生株率
8.4%(前年1.8%、平年14.2%)

・9月2半旬の寄生株率は
10.8%(前年—、平年8.1%)



親株の確保

- ・ 炭そ病が発生していない健全な苗を使用する。
- ・ 年内に生育を旺盛にした株が、春先のランナー発生が多くなるので、11月まで定植を終わらせておく。
- ・ 数が不足する場合や、親株用の苗に炭そ病の発生が多い場合は、秋冬ランナーを利用する。その場合は、炭そ病の感染の可能性が低いハウスビニル被覆後に発生したランナーを利用する。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!

農作業慣れと油断が事故を招く